育児書の変遷にみる子ども親・育児児の社会史的考察②

首藤美香子（水前に女子大学）

1．近代「育児学」の成立とその背景

近代の育児書の歴史研究を試みる場合、「育児学」「育児書」「育児専門家」の概念変化をすることから出発しなければならない。つまり、「育児」というものを含む社会的・文化的な役割の変化を考察しながら、それが歴史的社会的な構築を示すものとすることから研究対象にすべき、それは人々の育児の視点を創出する過程を理解することが第一の重要な課題となる。

一般に「育児学」Puericulture は、1864 年にフランスのカロン博士によって創案された新語であるとされる。それは、18 世紀に使われていた「子ども育て方」ではなく、「ラテン語の語源を用い、伝統的な言語主義を捨て去って、科学的に立てた高い見識を示すという意図のもとで生み出された。カロン博士の主張は、家畜の品種改良を目的に開発された飼育法をモデルにした育児技術であったため、その実用主義が批判の対象とされ、学問としての「育児学」はいったん放棄されるが、1900 年にピナークル博士によって復活するに至る。

しかし、カロン博士のアイデア自体は、家畜の品種改良を目的に開発された飼育法をモデルにした育児技術であったため、その実用主義が批判の対象とされ、学問としての「育児学」はいったん放棄されるが、1900 年にピナークル博士によって復活するに至る。

2．「育児学」と規則的授乳法

いつの時代でも医師は母乳哺育を貫徹していたが、20 世紀初頭にはその主張がかつてはほど力強かったが、それが過去の論争と本質的に異なる点は、規則的な授乳法の推進にあたった。「育児学」の提倡者カロン博士は、「授乳は年に六回以内、一日の授乳時間は 15 分に制限し、授乳間隔は規則的にあれば、夜間は 6 ないし 8 時間は完全に休ませること」と、栄養学的な観点から子どもが泣いたらすぐに授乳する習慣を反対した。つまり、規則授乳法は、「育児学」の成立と密接な関係にあるといえる。

マルファニ（1902）の主張からも顕著のように、規則授乳法は、「未熟」である「女性の」の「本能」を文明化し「使い慣らす」という発想のもとに提起されており、「育児では様々な知識を要する難しい技術」として「育児学」を立脚させることで、母乳の専門家が育児に干涉する合理的な根拠を得たといえる。

一方、カロン博士（1908）は、「子ども正しい発育を確実にする」「ひとつの科学」である「育児学」を、「女性にとっての基本の學問」として、その「社会的必要性」を強調したが、それによって女性を家庭と育児に用い込む一助の論法が成立したともいえる。

一方、カロン博士らの主張は、医師が母乳哺育を貫徹していたが、20 世紀初頭にはその主張がかつてはほど力強かったが、それが過去の論争と本質的に異なる点は、規則的な授乳法の推進にあたった。「育児学」の提倡者カロン博士は、「授乳は年に六回以内、一日の授乳時間は 15 分に制限し、授乳間隔は規則的にあれば、夜間は 6 ないし 8 時間は完全に休ませること」について、「子ども正しい発育を確実にする」「ひとつの科学」である「育児学」を、「女性にとっての基本の學問」として、その「社会的必要性」を強調したが、それによって女性を家庭と育児に用い込む一助の論法が成立したともいえる。

一方、カロン博士らの主張は、医師が母乳哺育を貫徹していたが、20 世紀初頭にはその主張がかつてはほど力強かったが、それが過去の論争と本質的に異なる点は、規則的な授乳法の推進にあたった。「育児学」の提倡者カロン博士は、「授乳は年に六回以内、一日の授乳時間は 15 分に制限し、授乳間隔は規則的にあれば、夜間は 6 ないし 8 時間は完全に休ませること」について、「子ども正しい発育を確実にする」「ひとつの科学」である「育児学」を、「女性にとっての基本の學問」として、その「社会的必要性」を強調したが、それによって女性を家庭と育児に用い込む一助の論法が成立したともいえる。

一方、カロン博士らの主張は、医師が母乳哺育を貫徹していたが、20 世紀初頭にはその主張がかつてはほど力強かったが、それを過去の論争と本質的に異なる点は、規則的な授乳法の推進にあたった。「育児学」の提倡者カロン博士は、「授乳は年に六回以内、一日の授乳時間は 15 分に制限し、授乳間隔は規則的にあれば、夜間は 6 ないし 8 時間は完全に休ませること」について、「子ども正しい発育を確実にする」「ひとつの科学」である「育児学」を、「女性にとっての基本の學問」として、その「社会的必要性」を強調したが、それによって女性を家庭と育児に用い込む一助の論法が成立したともいえる。
から発想を得ていることは前述した通りだが、この時期の「育児書」には、乳幼児に関する医療・教育に関する内容が加えられ、この時期の「育児書」には、医療・教育に関する内容が加えられる。つまり、近代の「育児書」は、優生思想および通称しているものである。

国家にとって有用な人材の増強と労働力の確保を目的として、地方自治体の健康維持活動が進められていた。例えば、パンフレットの配布、訪問家訪問制度、母親学級、ミルク（殺菌を通じて調製する乳児）の授乳推薦のため、医師による乳児診療サービスなどが、地方自治体や民間の慈善団体によって試みられている。

それらの活動の中で特に力入れられたのは、規則者の乳幼児と並んで衛生観念や清潔志向の普及である。それは、19世紀後半の20年間に急激な進展を遂げた細菌学・免疫学・臨床医学の発展と無関係ではない。医師の乳幼児の救難に対する貢献によって、医師の必要性が認められた結果、「育児書」では、病気の治療よりもその予防に重点が置かれたようになる。母乳の摂取は、養育上講じた食事法・合理的な装備並び、新鮮な空気と明るく快適な環境作り・健康体験を形成するための運動や散歩、生活・日光浴など、身体を健康に保つための活動は必要である。優生学による精神衛生面に対する国家の介入とあわせると、心身両面を射のたした衛生学も、「育児学れ」成立の理論的基盤となっているといえるのではないか。

4. 「育児学」や乳幼児の研究運動・発達心理学

「育児学」の成立が、優生学と無関係ではない点から見ても、19世紀末の欧米の思想界を震撼させたダーヴィングの進化論の影響は明白である。実をのこして、乳幼児に関する科学研究もこの進化論に導かれて自然化され、発表して本格化する。サラ、プライマー、スタンレーホール、デューイ等を中心として、19世紀末に始動した乳幼児研究（Child Study Movement）は、万物の起源に関する科学的研究の一環として、主として教育研究が必要とする乳幼児の心身の発達過程の基本を研究しようとする活動であった。

ダーヴィンの兄弟ヘッカの反復（個体発生は系統発生を繰り返す）を支持した、米国発達心理学の先駆者ホーガの研読活動は、「進化発展の途上にある乳幼児の心理的内容を、親が養育者が客観的に把握し、正しい理解することが、現実の教育の改善に効力をもつという点にあった。このように、子ども研究の成果は、「乳幼児」にも次第に反映され、一般的な親の育児方法に変革を迫っていた。

・育児書「」執筆者は、乳幼児に関する医療・教育に関する内容を統計的に分析する作業に着手し、体形、体型が平均値の範囲で、健康・教育の必要なことを目指していた。また同時期においては、発達記録を記す乳幼児記録が発売され、何かを書きとるために子どもの観察が裏づけられている。

近代転換期に早くとも、「神経質な乳幼児」が問題視され始めたが、その原因は、大人の外来の観念と同様に、乳幼児の存在が大きな問題提起を及ぼす乳幼児の問題であるとされる。「神経質な乳幼児」は、科学時代に乳幼児に共同する特徴として、「授乳のための例」を例え、乳幼児の世間の時間における乳幼児が泣いても怒らない、「一人で放置する」、「遊ぼませない」という指針があるが、これは病気感染を防ぐために接触を制限するという目的以外に、「安定」で「細胞」を乳幼児のために平を静かに保つ環境を確保するという足跡をたったない。心理学の発展は、乳幼児の表現をその必然性に変化を促した一例とみることができるよう。

5. 結論

以上、近代の「乳幼児」、「乳幼児」、「乳幼児」など、近代以前のものとは異質のものではないかという問題意識のもとで、それぞれ概念の歴史的形成過程の再検討を試みた。「育児学」の存在価値は、栄養学・医学・優生学・乳幼児・発達心理学などの分野にあり、乳幼児の研究成果が、「育児専門家」や「乳幼児」を通じて、通俗化・大衆化され、乳幼児の発達を乳幼児向けに提供した。

「小児医学」が、病気や障害など問題のある乳幼児の治療を目的に成立したのに対して、乳幼児学は、乳幼児の「正常」な心身を「維持」し、完全に「開花」させることの目的で成立していたといえる。その意味で、近代の「育児」をもつ思想・言説・関係性は、乳幼児を科学的・教育的・哲学的・生活的と見なすようになることによって展開していたとも思われる。今後も、乳幼児の生活の具体的な記述を比較検討し、この乳幼児を「作る」心性の歴史的形成を確認していきたい。